「親鸞」なのか、「禅」なのか
―東京都 23 区周辺における講演会・講座（2015 年度報告）―

伊　東　昌　彦

1. はじめに

東京都 23 区周辺における伝統仏教関連の講演会・講座 [*1] のテーマは、「親鸞」と「禅」に関するものが目立つ。「2010・2011 年度報告」において、「親鸞」をテーマに掲げる講座は「法然」を 100 ポイント近く引き離して人物において最多であり、「禅」は実践を含む講座において圧倒的な開催数であった [*2]。「親鸞」は浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派）と真宗大谷派（以下、大谷派）、「禅」は臨済宗妙心寺派（以下、臨済宗）と曹洞宗の、それぞれ教団関連の団体が主催者として多くなっている。

東京都では日蓮宗が寺院数最多となるが [*3]、大本山である池上本門寺（大田区）での講座は活発であるものの [*4]、宗門関係学校である立正大学（品川区）には定期的な講演会・講座の開催は見られない。むしろ、一般大学である早稲田大学（新宿区）における講演会・講座のほうが仏教を扱うものが多く [*5]、全体として一般への発信力が強いとは言えない。日蓮宗は宗務機能のある大本山・池上本門寺と宗門関係学校・立正大学を都内に設置してはいるが、冒頭の 4 宗派においては、宗務機能として曹洞宗が宗務庁を港区に設置するものの、それ以外の宗派は東京にはなく、宗門関係学校も本願寺派の武蔵野大学（江東区）と曹洞宗の駒澤大学（世田谷区）・駒沢女子大学（稲城市）が設置されるだけである。伝道布教の盤石な基盤がないため、これら宗派が信徒獲得に熱心であろうことは容易に想像がつくが、圧倒的な講演会・講座の開催状況からすると、同時にそれらが人々に受け入れられてきたことも事実であろう。言い換えるならば、「親鸞」と「禅」とは人気コンテンツなのである。

本論においては、「親鸞」と「禅」に関する講演会・講座に焦点をあて、その開催を報告するとともに、それぞれの主催者の発信力についても考察する。2015 年度のデータベースに基づくが、場合によってはその前後のものを取り上げることもある。なお、末尾には参考資料として、未発表の「2013 年度報告」が添付してある。

2、「親鸞」をテーマとする講演会・講座

2015 年度において、「親鸞」をテーマとする講演会・講座は、本願寺派では築地本願寺（中央区）・武蔵野大学・REC コミュニティカレッジ（千代田区）、大谷派では真宗会館（練馬区）・親鸞仏教センター（文京区）で主催されるものがほとんどである。この他、浄土宗系の淑徳大学・池袋サテライトキャンパス（豊島区）や東京大学仏教青年会（文京区）、朝日カルチャーセンター等のカルチャースクールでの主催も見られるが、開催数としては僅かである。したがって、ここでは本願寺派と大谷派の主催するものに扱いを限る。

築地本願寺と武蔵野大学を擁する本願寺派に比して、大谷派は東京本願寺（台東区、東本願寺派）の分離独立 [*6] もあり、また、宗門関係学校が首都圏にはないこ

とから、拠点として見劣りする面がある。しかし、外部施設を積極的に利用することは本願寺派に先んじており、それにより拠点の脆弱さを補完していると言える。ただし、2016 年度には築地本願寺による「築地本願寺 GINZA サロン」[*7] がオープンしたことからも分かるように、こうした外部施設を利用した講演会・講座は、近年、目立ってきている [*8]。「2008・2009 年度報告」では人気講師との連携の必要性を指摘したが [*9]、今はそれと同時に、教団とは直接関係のない外部施設を利用することによって、より一般への発信力を高めている傾向にある。

そこで、主催者の所在地はすでに括弧内で示しているが、2016 年度からのものも含め、主催者別に開催地を確認してみると、図 1 のようになる。「○」は内部施設、「◎」は外部施設を示す。

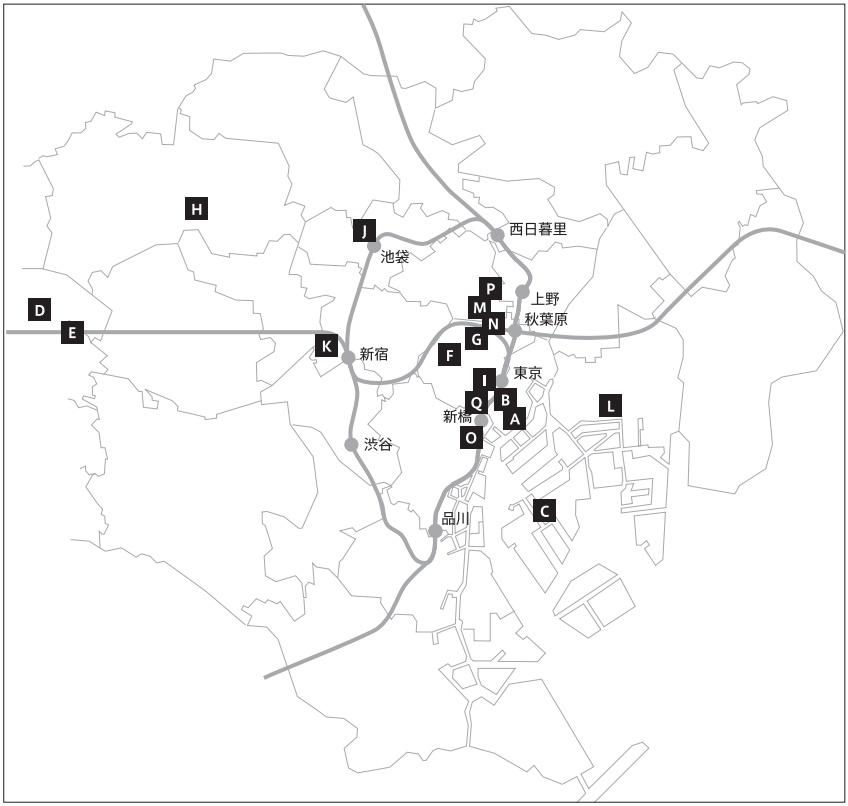

図 1

本　願　寺　派　（○は内部施設、◎は外部施設）

①築地本願寺
- A　○築地本願寺境内（中央区築地）
- B　◎竹中銀座ビルディング「築地本願寺 GINZA サロン」（中央区銀座）

②武蔵野大学
- C　○有明キャンパス（江東区有明）
- D　○武蔵野キャンパス（武蔵野市新町）
- E　◎三鷹三菱ビル「三鷹サテライト教室」（武蔵野市中町）
- F　○千代田女学園「千代田サテライト教室」（千代田区四番町）

③ REC コミュニティカレッジ
- G　◎明治大学駿河台キャンパス
  「REC コミュニティカレッジ東京」（千代田区神田駿河台）

大　谷　派　（○は内部施設、◎は外部施設）

④真宗会館
- H　○真宗会館内（練馬区谷原）
- I　◎ JP タワー「丸の内親鸞講座」・「親鸞フォーラム」（千代田区丸の内）
- J　◎メトロポリタンプラザビル「池袋親鸞講座」・「仏教学講座」（豊島区西池袋）
- K　◎新宿住友ビル「新宿親鸞講座」（新宿区西新宿）
- L　◎江東区役所産業会館「湾岸親鸞講座」（江東区東陽）
- M　◎東京大学仏教青年会「本郷親鸞講座」（文京区本郷）
- N　◎秋葉原 UDX「秋葉原親鸞講座」（千代田区外神田）
- O　◎新橋東急ビル「仏教学入門講座」（港区新橋）※直接「親鸞」は扱わない

⑤親鸞仏教センター
- P　○親鸞仏教センター（文京区湯島）
- Q　◎東京国際フォーラム「親鸞思想の解明」（千代田区丸の内）

2016 年度現在、東京都の人口は 1,300 万人を超え、特別区である 23 区内には 900 万人を超える人々が生活をしている。地方創成が叫ばれてはいるが、東京都周辺への人口流入は止まることがない。東京は明治以降、旧江戸市中周辺から多摩方面へと市街地化が進み、第二次世界大戦後の復興から高度経済成長期、安定成長期におけるバブル経済期とその崩壊を経て、規制緩和や金融緩和政策等による変革期のなか､現在は東京オリンピックに向けて湾岸部の開発が加速度的に増している。近隣の神奈川県・埼玉県・千葉県を合わせれば 3,000 万人以上の人々が一都三県に暮らしており、これは日本の人口のほぼ 1 / 4 に相当する。

これまで本願寺派は教団関連の施設を利用することが多かったが [*10]、銀座という日本有数の繁華街に「築地本願寺 GINZA サロン」を開設したことは、一般への発信を高める狙いがあると見て取れる。武蔵野大学も本部を都下である武蔵野市か

ら、東京臨海副都心の江東区有明へ移している[*11]。もとより築地本願寺も都心部にあり湾岸部ではあるが、東京オリンピックを見据えて、湾岸部はこれからも開発が進む可能性の高い地区であり、将来性を期待してのことであろう[*12]。REC コミュニティカレッジは龍谷大学のエクステンションセンターであり、関西地方中心に講演会・講座の開催をしているが、2009 年度から東京にも進出している。大谷光淳門主が新門時代に講師を務めており、常時満席の人気講座であった[*13]。

一方、大谷派は 2015 年度において、講演会・講座の開催数は 91 回であり、本願寺派の 282 回には及ばないものの、その広域開催には目を見張るものがある。東京駅（丸の内）・池袋駅・新宿駅・秋葉原駅・新橋駅は、JR 山手線の乗降客数トップ 10 に入っている[*14]。トップ 3 は新宿駅・渋谷駅・池袋駅なので、これに渋谷駅を加えれば、東京の繁華街をひとまず網羅しているとも言える。また、東京駅・品川駅・新橋駅周辺は有数のビジネス街であり、秋葉原駅周辺は近年若者の人気スポットでもある。

本願寺派と大谷派を併せて考えてみるならば、都心部のほぼどこであっても、「親鸞」の講演会・講座があると言っても過言ではない。しかも、上記の講演会・講座に単発なものはなく、すべてが定期開催されているものである。こうした強い発信力は他宗には見られず、浄土真宗ならではの、仏法を聴聞することを長年に渡って続けてきた伝統の成せるわざとも言えるだろう。

3、「禅」を実践する講演会・講座

2015 年度において、「禅」の実践を含む講演会・講座は、臨済宗では東京禅センター（世田谷区）と、宗派の任意団体ではあるが臨済会（台東区）、そして、曹洞宗では曹洞宗宗務庁（港区）・永平寺別院長谷寺（港区）・駒澤大学の主催するものが多い。「親鸞」にくらべ、「禅」はカルチャースクールでも一定の開催が見られるが[*15]、「親鸞」の場合と比較するという意味から、やはり扱わないこととする。

臨済宗は東京都に宗務機能や宗門関係学校を持つことはないが、教団の首都圏拠点として東京禅センターを設置している。これは大谷派の真宗会館と共通する機能を持つが、比較的規模は小さいと言える。しかし、臨済宗は黄檗宗と共同で公式インターネットサイト「臨黄ネット」[*16]を運営しており、このサイトにはショッピングモールも存在する。また、両宗協力のもと設立された公益財団法人・禅文化研究所では、寺院管理ソフトの販売[*17]、追跡型広告の導入など、パソコンやインターネット関連事業では他宗よりも先んじているところがある。拠点の弱さをインターネットで補完する意図があるとも見受けられるが、少なくとも他宗との差別化はなされていると言えるだろう。講演会・講座においても特徴的な活動が見られ、「ZEN cafe」は一般のレストランで開催される坐禅会である。なお、臨済会は臨済宗有志によって、教化の充実を図って設立された教化組織である[*18]。妙心寺派東京教区との共催で「禅をきく講演会」を開催しているので、教団関連の団体に準じるとして含めた。

曹洞宗は単独宗派として寺院数が全国最多であり[*19]、東京都に大本山はないものの、大本山・永平寺の別院が港区西麻布にあり、また、近隣の横浜市鶴見には大本山・總持寺がある。宗務機能も前述のとおり、宗務庁が単独で港区に設置されて

いる。しかも宗門関係学校として駒澤大学と、都下になるが駒沢女子大学も設置されているので、首都圏の拠点としては盤石に近いものがあると言える。なお、本データベースには収録されていないが、青松寺（港区）、泉岳寺（港区）、豊川稲荷妙厳寺・東京別院（港区）、とげぬき地蔵・高岩寺（豊島区）など、一般に認知されている寺院のなかには曹洞宗に属するものが少なくない。教団関連以外の活動も併せて考えるならば、その影響力はかなりのものになるのではなかろうか。いずれにしても、臨済宗に比して東京での活動は大規模であり、なかでも全国展開する「禅をきく会」は 1,000 人規模以上の一般ホールで行われるもので [*20]、これは大谷派の「親鸞フォーラム」を上回る規模である [*21]。

以下、同じく主催者別に開催地を確認すると、図２のようになる。

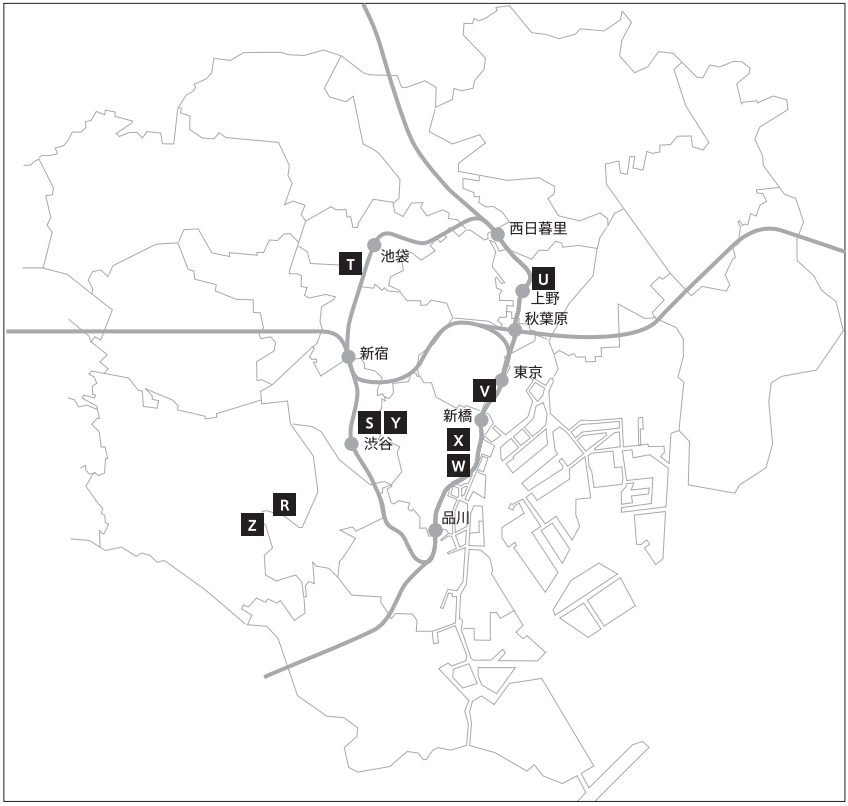

図 2

臨　　済　　宗　（○は内部施設、◎は外部施設）

③臨済宗妙心寺派東京禅センター
- R　○東京禅センター内（世田谷区野沢）
- S　◎炭火ダイニング豊和「ZEN cafe 表参道」（港区北青山）
- T　◎欧州目白食堂「ZEN cafe 目白」（豊島区目白）

④臨済会（任意団体）
- U　○臨済会内（台東区東上野）
- V　◎有楽町よみうりホール「禅をきく講演会」（千代田区有楽町）

曹　　洞　　宗　（○は内部施設、◎は外部施設）

⑤曹洞宗宗務庁
- W　○東京グランドホテル内（港区芝）
- X　◎メルパルクホール「禅をきく会」（港区芝公園）

⑥永平寺別院長谷寺
- Y　○長谷寺境内（港区西麻布）

⑦駒澤大学
- Z　○駒沢キャンパス（世田谷区駒沢）

2007 年 9 月から 2008 年 6 月まで、築地本願寺（当時は本願寺築地別院）境内で「カフェ・ド・シンラン」が期間限定でオープンした [*22]。また、2015 年には高野山真言宗が、南海鉄道との共催で 10 日間限定の「高野山カフェ」を千代田区丸の内で開催している [*23]。他にも一般寺院主催のものなど、仏教とカフェとのコラボレーションは近年盛んである。仏教についての簡単な紹介や法話、お試しの気分で取り組める坐禅、普段はあまり聞く機会のない声明、こうした企画が手軽なカフェで楽しめるわけである。東京禅センターの「ZEN cafe」も、これらと同じ方向性を持っていると言える。カフェを楽しみつつ、椅子を使った「椅子坐禅」の体験をする。決していい加減なものではなく、禅僧の指導があり、最後には臨済宗の儀式的飲茶である「茶礼（されい）」もある。こうした入門的企画は、いわゆる宗教的浮動層 [*24] を取り込むためには効果的であろう。

一般的に坐禅会というものは、法話会と同じように、一般寺院において無数に行われているものである。しかし、境内に人々を呼び込むということは存外に難しく、運営にあたる住職は宗派に関わらず腐心していることだろう。教団の存在意義の一つは知名度を活かした「旗振り役」になれることであり、そのためには一般への発信力を高めていくことが重要である。臨済会と妙心寺派東京教区が共催する「禅をきく講演会」、そして曹洞宗宗務庁の主催する「禅をきく会」は、「禅」というイメージを前面に出してアピールをする。とくに「禅をきく会」は全国各地で行われており、1,000 人規模の講演会でありながら「椅子坐禅」をするなど、「禅」の発信に余念がない。

曹洞宗は東京都内に池上本門寺・増上寺・護国寺・浅草寺など、大本山と呼称されるような大規模寺院を持たない。しかし、宗務機能は教団直営の東京グランドホ

テル内にあり、かつ宗門関係学校も全国的に有名な駒澤大学がある。駒澤大学では毎週日曜日に坐禅会があり、それは別院長谷寺でも同じである。もちろん、各地の一般寺院でも坐禅会がある。敢えて言うならば、禅というものはどこでやっても禅なのである。永平寺で禅をしても、近所の一般寺院で禅をしても、禅であることには何ら変わりはない。「禅」という言葉には、場所や人物や宗派を意識させない普遍的な響きがある。多くの都民が知っている大本山がなくとも、「禅」という言葉を発信し続けることで、それ以上の効果があるとの目算があるのかもしれない。これは臨済宗においても同じことが言え、シンプルに「禅」であることが、強い発信力になっていると言える。

４、教団の発信力

さて、こうした状況において、本願寺派と大谷派、そして臨済宗と曹洞宗に共通して言えることは、定期的かつ外部施設を利用しての開催の多さである。東京都の寺院数は日蓮宗が最多であり、次点は僅差で浄土宗となってはいるが[*25]、両宗に定期的な講演会・講座の開催は見られても、同時に外部施設を利用するようなものは見当たらない。決して開催数が少ないというわけではなく、池上本門寺での講座や実践、大正大学や淑徳大学での講演会・講座はむしろ多いと言えるのだが[*26]、一般への発信ということを考慮した場合、これらはある程度の予備知識や経験のある層が主たる対象になろう。なぜならば、寺院の山門をくぐるということや、大学の構内へ入るということは、一般的に日常のことだとはまだ言い切れないからである[*27]。

宗教的浮動層を取り込んでいくためには、単一の機会だけでは事足りない。より重層的に多様な機会がなければ、彼らの受け皿にはなり難いのである。たとえば、手軽に体験できる外部施設での講演会・講座があったとしても、それに参加後、より深く追体験していくような機会がなければ、その人にとって一過性の珍しい体験で終わるだろう。また、多様なコンテンツを用意したとしても、そこに至る過程がなければ、そもそも人を呼び込むことすら難しい。引いてこなければ、押すことも出来ないことは当然である。最終的に一般寺院の活性化の一助となるためには、少なくとも図３のような、２段階のアクションは必要である。

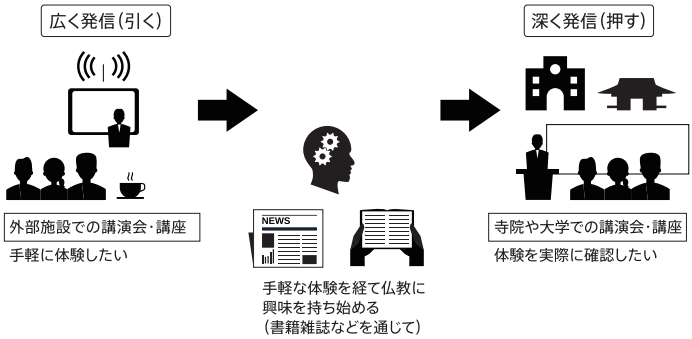

図３

まるで一般企業の販売促進であるが、「不特定客」とも言える宗教的浮動層を取り込むためには、一般企業に倣うことも是としなければならない。そして、こうした流れのなかで「禅」を連呼する臨済宗と曹洞宗はブランド形成にも長けていると言え、「禅」という言葉を一般化しつつ、それを扱うプロフェッショナル集団としての禅宗教団の価値を高めている。「禅」を語るだけであれば誰にでも出来るが、実践指導は禅僧にしか出来ないからである。しかし、これは何も「禅」に限ったことではなく、同じことを大谷派も実行している。そう、「親鸞」の連呼である。

先に示した大谷派の講演会・講座を見てみるならば、まさに「親鸞」のオンパレードとなっている。大谷派は浄土真宗や真宗大谷派という宗派価値よりも、「親鸞」の持つインパクトに価値を見出したと言える。「親鸞」は親鸞聖人の人名ではあるが、おそらく空海と並んで一般的に有名である。「大師は弘法（空海）に奪われ、開山は親鸞に奪わる」[*28] とも言われるように、日本人の僧侶として代表的なことは確かである。しかし、空海が真言宗の宗祖で密教行者であったことや、親鸞が浄土真宗の宗祖でお念仏や他力を説いたこととなると、これらは簡単には結びついていかない。真言宗の講演会・講座には「弘法大師」・「空海」・「真言宗」・「密教」・「高野山」という言葉の使用の混在が見られるが、これらを全て統一的に受け取れる層というのは、かなりの知識を持っている層である。言うなれば、信徒でなければ分からないレベルなのである。つまり、「親鸞」と「浄土真宗」を結びつけて理解できる層というのは、宗教的浮動層にはあまり存在せず、言わば「顧客」のレベルでないと、これは容易とは言えないのである。おそらく大谷派は、「浄土真宗本願寺派」というブランドに対抗するため、敢えて「親鸞」に特化したのであろう。「親鸞」の連呼は「禅」の連呼と同じく、禅僧のような実践指導こそないものの、大谷派こそが「親鸞」のプロフェッショナルであることの一般への発信なのだと考えられる。

5、「超・家の宗教」としての浄土真宗

全国的に見れば浄土真宗と禅宗は日本仏教における二大勢力とも言え、血縁上のルーツを地方に持つ人々にとっても、両宗がいわゆる「家の宗教」になっている可能性は高い。ならば、地方出身者の多い東京都民にとっても、ひとまず「親鸞」と「禅」は身近な存在と言えるのかもしれない。しかし、東京は多様性あふれる場所柄である。どの宗派においても、こうしたルーツが普段の興味に同じように影響を及ぼしていると即断することは危うく、人々の興味については別視点からの考察も欠かせない。

そこで、宗教性ということに着目して考えてみたい。末尾に添付した「2013 年度報告」において、早稲田大学における仏教関連の講座の多さを指摘した。早稲田大学は宗門関係学校ではないので、開講目的に伝道布教が含まれていることはない。武蔵野大学が教義中心の講座内容になっているのに対して、開講講座の半数は仏教美術・仏教史を内容とするものになっている。これは宗門関係学校との差別化を狙ってのことであろうが、それだけ仏教美術・仏教史への関心・人気が高いことを示唆している。教団とは一線を画したところから仏教に触れてみたいという層が、一定程度は存在するのだと考えられる。おかしな言い方になるが、教団と言えば宗教がつきものなので、教団関連の講演会・講座であると宗教に対する警戒心が増すので

あろう。仏教美術や仏教史は学問的なイメージが先行し、宗教に触れずに仏教を楽しめるところが利点なのだ。インターネット通販 amazon.co.jp の仏教書ランキングにおいても、仏教を宗教として正面から扱う書籍より、その思想や修行を日常生活へ応用するための指南書的なものが人気となっている。たとえば、本論文集所収の多田論文（「現代人は仏教に何を求めているのか～アマゾンランキングを通しての考察～」）によるならば、毎月 20 位までの仏教書を 1 年間調査した結果、それらの内容は「生き方」が圧倒的なポイントを得ており、かなり下がって「瞑想」、「修行」、「悩み」、「禅」、「心」と続く。多田はそれを受けて、「仏教の公益性、死生観、信仰、仏事、儀式に対する関心は高くない」と結論づけている [*29]。仏教へのアプローチの仕方は、早稲田大学の事例と共通していると言える。

また、これは初詣でや墓参りにも同じことが言え、たとえば都内寺院で最も初詣で客の多い浅草寺（台東区）において、おそらく、ほとんどの人が浅草寺の宗派名「聖観音宗」を知らないだろう。宗派教義よりも「ご利益」である。墓参りについても、これは読んで字のごとく「墓」に参っているのであり、境内墓地ではあっても、お参りの主要目的は「墓」である。いずれも宗教性がなくはないが、信仰よりも風俗習慣である側面も強く、その意味において宗教性は薄いと言える。

ひるがえって「親鸞」と「禅」であるが、まず「禅」について言うならば、禅の宗教性には問題がないわけではない。禅の己事究明が本質的に宗教であるのかはさて置いたとしても、禅は一般に宗教として認識されているのか。たとえばインターネットでは、「禅はものの見方である」という意見や、「禅は人の生き方なのだ」という意見があり、総じて禅に宗教を求めていない意見が目立つ。禅はひとまず座るだけなので行為としてはシンプルであり、本尊に向って読経することもない。何も無いわけなので、宗教として捉える向きがないことも意外ではないだろう。そうであるならば、禅はむしろ、一般的感覚における宗教性が薄いので人気があるとも考えられまいか。「Zen」として世界的な認知を得てはいるが、宗教性の希薄さが人気の秘密であれば皮肉なことである。

そして、つぎに「親鸞」を「禅」と比べてみるならば、「親鸞」はお念仏や他力、そして信心について言及することになるので、一般的に考えられるところの宗教に合致する。宗教の定義は様々ではあるが、阿弥陀如来に向ってお念仏をしたり、他力や信心のことを説いたり、「正信偈」のお勤めをすることに宗教性を感じない人はいないだろう。もとより宗教には超越的存在が不可欠だと言えるが [*30]、阿弥陀如来の存在はそれを示して余りある。「禅」に比べて宗教を感じさせる行為や事柄に豊富なのである。したがって、宗教性という視点からするならば、「親鸞」は不人気コンテンツの烙印を押されてもおかしくはない。しかし、実際にはまったく逆なのであり、宗教性を感じさせないことは講演会・講座の人気を支える役目を果たすものの、「親鸞」には当てはまらない。他の人気コンテンツは総じて宗教性が薄いことに鑑みれば、むしろ、「親鸞」だけ当てはまらないと言ったほうが正確かもしれない。では、どこに人気の主因を求めれば良いのであろうか。

これは仮説ではあるが、古くからの浄土真宗の門徒にとって、やはり「親鸞」は特別であって、たとえ「家の宗教」としての浄土真宗ではあっても、「親鸞」であることは重要なのである。言い換えれば、他宗との互換性が低いのが浄土真宗であって、わざわざ他宗の講演会・講座に行こうとは思わない。禅に関心を持つこともあ

るだろうが、どうせ行くなら「親鸞」の講演会・講座なのである。地方流入層の世代が重なれば重なるほど、この傾向は薄れていくわけであるが、今はまだ潜在的な門徒層が厚い。関東では比較的馴染みの薄い「正信偈」に郷愁を感じ、引き寄せられるように講演会・講座に参加する人もいるだろう。他宗においては、経典や行事など、宗派を横断することが可能なものも多い。もし「家の宗教」が明確であったとしても、他でも代替可能な点は多いと言える。しかし、たとえば全国的にポピュラーな『般若心経』を浄土真宗で用いることはなく、大般若経会や施餓鬼会など、複数の宗派で見られる行事も浄土真宗にはないものが多い。浄土真宗にはオンリーワンなものが多いのである。こうしたことから、門徒の家系であるという意識が宗派横断を防止し、それが東京における人気コンテンツ「親鸞」を成り立たせているのではあるまいか、という考えに至った[*31]。

筆者は神奈川県西部で住職を拝命しており、自坊周辺は禅宗がほとんどというなか、西日本から移住してきた住民も多い。東京ではなく神奈川、しかも西部でありより都心から離れていてもなお、上記のことを実感することがある。浄土真宗は他宗と同列に語ることのできる「家の宗教」ではない。「家の宗教」だからという程度ではなく、「家の宗教」を超えた、まさしく「超・家の宗教」なのだと思えるのである。すなわち、浄土真宗は唯一、「超・家の宗教」となり得た宗派であり、だからこそ宗教性豊かな「親鸞」をテーマとする講演会・講座であっても、これだけの人気を博し続けている。宗教性の薄さが前提となりがちな東京であっても、浄土真宗でないとならない、他宗に替えることは出来ないという想いが勝っていると考えることは、あながち見当はずれではないと信じたい。

主観によった仮説であることは否めないが、浄土真宗の持つ特異性について異論はなかろう。今後の課題としては、講演会・講座の参加者へ実際に動機調査をする必要があり、それにより浄土真宗が「超・家の宗教」であると言えるのか、この点をデータに基づいて立証しなければならない。これは講演会情報データベース業務の範囲を超えることになるが、何らかの形で明らかにしたいと思う。

6、おわりに　―東京オリンピックに向けて―

東京都 23 区周辺における講演会･講座は､｢親鸞｣なのか､それとも「禅」なのか、というような様相を呈している。本願寺派と大谷派、そして臨済宗と曹洞宗は、いずれも一般への発信力が強く、伝道布教のための流れを作り出している。本願寺派にとっての懸念材料と言えば、講演会・講座の開催地の数で大谷派の後塵を拝しているという点であるが、現況において留意すべき点は、「親鸞」＝「本願寺」もしくは「築地本願寺」というイメージを定着させることであろう。大谷派は「本願寺」というブランド使用には不利な点もあり[*32]、「築地本願寺 GINZA サロン」の活かし方次第で、開催数の多い本願寺派が大谷派を圧倒できる可能性はまだある。

2020 年には東京オリンピックが開催されるが、日本国内のみならず、海外からも注目される東京湾岸部に、築地本願寺と武蔵野大学は位置している。都内周辺に居住する潜在的門徒の発掘作業のためにも、このタイミングと立地はまたとないチャンスである。外部施設を利用して大小様々な講演会・講座を用意し、築地本願寺までスムーズに足を運んでもらうことが出来れば、「親鸞」の再認識はそう難し

いことではないだろう。宗門のさらなる発信力向上に期待したい。

なお、本論では触れることがなかったが、伝統仏教関連以外にも目を向けるならば、新宗教関連のものを除いて、チベット仏教やテーラワーダ仏教、そしてマインドフルネスに関する講演会・講座の開催数が増加傾向にある。今後は日本の伝統仏教のみならず、こうした仏教団体の活動にも注視すべきであろう。

（参考資料）

東京における仏教系の講演会・講座の開催状況（2013 年度）
―大学主催のものについて―

浄土真宗本願寺派総合研究所東京支所
委託研究員　伊東昌彦

1、はじめに

浄土真宗本願寺派総合研究所東京支所では、2005 年度より現在 [*33] に至るまで、東京における仏教系の講演会・講座の開催状況を調査している。これまで、2007 年度 [*34]、2009 年度 [*35]、2011 年度 [*36]、2012 年度 [*37] について、４回にわたり調査結果を報告してきた。

そのなかで見えてきたことは、伝統仏教教団主催の講演会・講座において、本願寺派（宗門関係学校を含む）が継続的に最大の主催者となっているということである。築地本願寺での開催のほか、武蔵野大学での開催も多く数えることができた。とくに武蔵野大学における講座は内容も豊富であり、東京における伝道布教の一翼を担っていると言える。大学は開催のための施設も充実しており、また、多くの教員を有しているため､講師の確保も比較的容易である。武蔵野大学における講演会･講座の開催は、今後も宗門にとって必要不可欠であることに間違いあるまい。

しかしながら、東京には他にも大学は多数存在している。一般大学はもちろん、他宗派関係の大学も多い。大学の持つ利便性は基本的には差がなく、仏教に関係する学問分野の専門家が教員にいれば、どんな大学でも講演会・講座を開催することができる。現況は各宗派の関係学校が中心ではあるが、すでに報告したとおり、カルチャーセンター主催のものなど、宗派とは関わりのないところで、仏教系の講演会・講座が人気を博している [*38]。こうしたことを踏まえるならば、一般社会や地域との連携の足掛かりとして、多くの大学で仏教系の講演会・講座が開催されるようになる可能性も考えられよう。

本論においては、こうした仏法興隆を歓迎しながらも、場合によっては宗門軽視に陥りかねない状況に危機感を覚え、2013 年度における、大学主催となる仏教系の講演会・講座の開催状況について報告をする。

2、各大学での開催状況

2013 年度､東京において仏教系の講演会･講座を開催している大学は､駒澤大学、淑徳大学、大正大学、東洋大学、花園大学、武蔵野大学、立正大学、龍谷大学、早稲田大学の９校である。東洋大学と早稲田大学以外は、いずれも各宗派の関係学校としての位置づけにある。花園大学と龍谷大学は京都所在であるが、東京でも講演会・講座を開催している。

それではまず、以下に開催状況をまとめてみる。

〈東京における各大学の開催状況〉

駒澤大学（曹洞宗）	47	早稲田大学	316
大正大学 （智山派・豊山派・浄土宗・天台宗）	69	淑徳大学（浄土宗）	188
		東洋大学	8
花園大学（臨済宗妙心寺派）	6	武蔵野大学（本願寺派）	316
立正大学（日蓮宗）	1	龍谷大学（本願寺派）	13

（単位：回）

武蔵野大学と早稲田大学がともに 316 回と最大となり、それに淑徳大学の 188 回、大正大学の 69 回、駒澤大学の 47 回が続く。各大学との比較においても、本願寺派が強いことが明確となった。宗派としては、淑徳大学の所属する浄土宗がこれに次ぐ勢力となっている。なお、淑徳大学は千葉市に本部を置く大学であるが、池袋サテライトキャンパス（豊島区）において、上記のように講座を多数開催している。

3、武蔵野大学と淑徳大学の比較

つぎに、武蔵野大学と淑徳大学の比較を試みる。武蔵野大学と淑徳大学は、ともに看護学部や教育学部を持つ大学として共通点が見られる。2013 年 5 月において、武蔵野大学は 9 学部[*39]・学部生数 6,371 名[*40]、淑徳大学は 6 学部[*41]・学部生数 4,491 名[*42] となっている。規模としては武蔵野大学がやや勝っているが、浄土宗関係の学校は大正大学もあり、淑徳大学と大正大学で学部が重なっていることはない[*43]。同宗派に所属する大学として、学生教育の役割を分担していると思われる。

武蔵野大学で開催している講座について、武蔵野大学サイトより、2013 年度は 44 件を採録することができた。内容を大きく分類するならば、真宗学系が 11 件、仏教学系が 33 件となっている。武蔵野大学には仏教学を専門とする教員が多いので、真宗学系の講座が少ないことも、やむを得ないと言ったところであろうか。この点は、龍谷大学との関わりも考慮すべきである。龍谷大学の東京での講座においては、武蔵野大学に比較すれば、真宗学中心の講座設定が行われているかに見える[*44]。

同じく淑徳大学で開催している講座について、淑徳大学サイトより 27 件を採録することができた。浄土宗学系が 3 件、仏教学系が 24 件となっている。淑徳大学においても、大正大学との関わりを考慮すべきであろう。ちなみに、大正大学は 3 宗 4 派の関係学校ではあるが、それぞれの宗学に近い内容の講座が多く見られる[*45]。

このように、武蔵野大学も淑徳大学も多くの講座を開催しているが、現況としては仏教学中心の傾向が見られる。仏教学の内容は多岐に渡っており、詳細な傾向を掴むことはできないが、ひとまず、両校の講座は宗派色の薄いものであると言える。東京は京都のように各宗派の本山が林立しているわけではなく、また、宗教についても比較的ドライな感情を持つことが一般的である。こうした東京特有な事情を鑑みるならば、宗派に拘らない両校の戦略は、ひとまず間違えたものではないと言え

よう。

ただし、傾向が似通ってしまっていることは、マネジメントの側面からして好ましいことではない。一般における親鸞の人気を考慮するならば、真宗学とは言わずとも、武蔵野大学の得意とする仏教学から、親鸞へアプローチをかける手法も考え得るであろう。「親鸞」という看板は、東京においても極めて有効なキーワードである。淑徳大学と大正大学は同じ首都圏に位置するが、武蔵野大学は首都圏における唯一の本願寺派宗門関係学校である。また、大谷派も首都圏には宗門関係学校を有してはいない。龍谷大学との連携も視野に入れる必要はあるが、現在、首都圏において、武蔵野大学は「親鸞」を掲げることの出来る唯一の宗門関係学校ということになる。この唯一性に着目していくことは、マネジメントにおいて有効であろう。

4、早稲田大学の動向

東京にある各宗派の関係学校のなか、武蔵野大学は群を抜いて講演会・講座の開催に力を入れている。次点である淑徳大学に大正大学の開催回数を単純に加えても、やはり武蔵野大学が優位であることに変わりはない。しかし、一般大学である早稲田大学とは同点である。早稲田大学には文学部東洋哲学コースがあり、たしかに仏教を学べる環境ではあるのだが、同じく一般大学である東洋大学のように、建学の精神に仏教が関係しているわけではない。早稲田大学の一般向け講座[*46]は規模の大きいものではあるが、講座内容として仏教が人気であるからこそ、これだけの開催回数を数えるのであろう。

それでは、ここで早稲田大学の動向について一言しておく。早稲田大学は 13 学部[*47]・学部生数 44,295 人[*48]であり、全国有数の大学として知名度も高い。そして、ここ 3 年間の開催回数を見てみると、2011 年度は 336 件、2012 年度は 326 件、そして 2013 年度は 316 件と、年間 300 件以上の仏教系講座をコンスタントに開催している。これは武蔵野大学の開催回数とほぼ変わらず、その他の大学の開催回数をすべて合計したものとも変わらない。つまり、東京における大学主催の仏教系講演会・講座は、武蔵野大学と早稲田大学とが双璧となり、その他の大学を合計して、ようやくこの双璧に並ぶといった状況なのである。

さて、早稲田大学における講座内容を見ると、武蔵野大学とは異なる点が浮かぶ。武蔵野大学は教義に関する講座がほとんどであるが、早稲田大学は教義のほか、仏教美術に関する講座が多い。2013 年度で見るならば、25 件中、実に 13 件が仏教美術を扱う講座となっている。以下、そのすべてを掲載する。

- 「敦煌石窟の美術―日本美術との関わり」、下野玲子（早稲田大学講師）
- 「仏像鑑賞のための日本史―仏教美術を育んだ時代の要請」、森下和貴子（美術史家）
- 「キリスト教美術と仏教美術との比較（14 世紀）」、倉澤正昭（川村学園女子大学教授）
- 「もっとやさしい仏像のみかた」、片岡直樹（新潟産業大学教授）
- 「仏像、日本へ渡る」、楢山満輝（桜美林大学講師）
- 「真言密教の展開と密教像―空海から聖宝へ」、近藤有宜（仏教美術史家）

・「三蔵法師玄奘の美術」、大島幸代（早稲田大学講師）
・「石窟美術の世界―歴代敦煌絵画」、濱田瑞美（早稲田大学講師）
・「雪の国（チベット）の仏像と歴史」、石濱裕美子（早稲田大学教授）
・「南都古都巡礼―歴史と美術を訪ねて」、小野佳代（早稲田大学講師）
・「京都古都巡礼―歴史と美術を訪ねて」、小野佳代（早稲田大学講師）
・「空海と密教美術―恐怖の造形」、正木晃（慶應義塾大学教授）
・「弘法大師空海の事績と美術」、真田尊光（早稲田大学講師）

おそらく、この傾向は各宗派の関係学校とは一線を画す目的によるのであろう。だとするならば、宗教団体には所属しない一般の大学として、仏教美術を中心に、戦略的に講座の内容を調整していると言える。その結果、「教義の武蔵野大学、美術の早稲田大学」という住み分けが成立し、早稲田大学でも受講者を集めることが出来ているのである。また、もちろん教義についての講座もあるので、仏教美術を入口として、教義への学びを深めてもらうこともできる。宗派色を好まない受講者にとっては、早稲田大学はオールインワンにもなり得るのである。武蔵野大学としては、早稲田大学の知名度のほか、こうした戦略にも対策を取っていく必要があるだろう。

5、おわりに

東京における仏教系の講演会・講座について、武蔵野大学を擁する本願寺派は、他宗派に比べてかなり優位な状況にある。別に論じたとおり[*49]、大谷派は大規模な講演会を開催するものの、拠点力が脆弱であることは否めない[*50]。また、上述のように、浄土宗は淑徳大学や大正大学を擁してはいるが、武蔵野大学の開催力には遠く及ばない。淑徳大学と開催傾向が似通っている点は問題ではあるが、「親鸞」というキーワードと、それを宗派として掲げることのできる唯一性を利用していくならば、もはや盤石とも言えるだろう。

ただし、早稲田大学の動向には注意を要する。仏教はそもそも宗派のものではないが、各宗派は何世紀にも渡ってそれぞれの仏教を護持してきた。関係学校による講演会・講座の開催も、その延長線上で考えられることである。それが今、グローバル化に見られるような境界線の消失によって、宗派とは関わりのないところで仏教が持ち出されることが増えた。仏教はいつの時代も人々の心をとらえ、人々を導いてきたからである。言い換えれば、仏教は常に人気コンテンツなのである。早稲田大学が仏教を扱うことには何の問題もないが、本願寺派としては、長年培ってきた伝道布教の手法というものを、今こそ東京において見せるときではなかろうか。

【註】

＊1　講演会情報データベース業務については、爪田一壽「首都圏講演会情報データベースの構築に向けて――一年間の情報収集から見えてきたもの―」（『浄土真宗総合研究』２、2007 年）、伊東昌彦「東京における仏教系の講演会・講座の開催状況（2008･2009 年度）」（『浄土真宗総合研究』６、2011 年）を参照。

＊2　伊東昌彦「東京における伝統仏教教団の講演会・講座の開催状況（2010・

2011 年度）―浄土真宗による総合的な仏教講座の開催に向けて―」（「報告書―東京における講演会・講座の開催状況―」、浄土真宗本願寺派総合研究所東京支所、2012 年）を参照。

* 3 『全国寺院名鑑―北海道・東北・関東篇』（財団法人全日本仏教会・寺院名鑑刊行会、1969 年）によれば、日蓮宗が 435 ヶ寺で最多となっている。

* 4 2016 年度において、池上本門寺では「日蓮聖人に学ぶ」・「法華経を生きる」・「仏教文化講座」・「聞けば分かる仏教講座」といった連続講座のほか、「朝食会」・「法話と写経の会」・「静坐と唱題行」・「洗心道場」（修行体験）・「一泊てらこや」のような体験講座があり、いずれも毎年定期的に行われている。

* 5 末尾に添付した参考資料、伊東昌彦「東京における仏教系の講演会・講座の開催状況（2013 年度）―大学主催のものについて―」を参照。

* 6 東京本願寺は 1981 年に真宗大谷派から分離独立し、現在は浄土真宗東本願寺派の「本山東本願寺」と名称を変更している。

* 7 築地本願寺 GINZA サロンでは、「仏教的な考え方をベースにした講座や、日々の暮らしのヒント、人生や終活を考える講座が集まったアカデミー」（https://ginzasalon.tsukijihongwanji.jp/top/kokoroacademy.html）として、「KOKORO アカデミー」が開講されている。

* 8 銀座界隈での講演会・講座の開催の必要性については、伊東昌彦「東京における浄土真宗の講演会・講座の開催状況（2012 年度）―本願寺派と大谷派について―」（「報告書―東京における講演会・講座の開催状況―」、浄土真宗本願寺派総合研究所東京支所、2012 年）でも言及した。

* 9 伊東昌彦「東京における仏教系の講演会・講座の開催状況（2008・2009 年度）」（前掲）を参照。

*10 近年における外部施設の利用は、2014 年に築地本願寺が横浜新都心ホールでシンポジウム「ご縁」を、宮崎哲弥（評論家）・音無美紀子（女優）・白石康次郎（海洋冒険家）を招聘して開催している。

*11 武蔵野大学は 2012 年に有明キャンパスを開設し、法人本部を武蔵野キャンパスから移転している。

*12 中央区の HP 掲載の中央区保健医療福祉計画推進委員会・第 1 回推進委員会「資料 5」（http://www.city.chuo.lg.jp/kusei/keikaku/hokeniryofukusikeikakunosuisin/hokeniryouhukusi26/no1suishiniinkai.html）によるならば、「中央区の人口は増加傾向にあり、平成 21 年に 11 万人、平成 24 年に 12 万人、平成 26 年に 13 万人を超え、132,610 人となっています」（p. 1）と示される。

*13 2009 年から 2012 年までに 8 講座をご担当された。

*14 梅原淳「初公開！山手線 29 駅「真の実力」ランキング―乗り換え客も加味すると、別の姿が見える」（「東洋経済 ONLINE」、http://toyokeizai.net/articles/-/45579、東洋経済新報社、2014 年 8 月 16 日）を参照。

*15 朝日カルチャーセンターや読売・日本テレビ文化センターなど。

*16 臨黄ネットは http://www.rinnou.net/ である。

*17 すなわち、宗教法人管理システム「擔雪Ⅱ」のことである。

*18 臨済会サイトは http://rinzaikai.jimdo.com/ である。

*19『宗教年鑑』平成 27 年度版（文化庁編、2016 年）によれば、曹洞宗は 14,559 ヶ寺で最多となっており、本願寺派は 10,206 ヶ寺で次点となっている。
*20 曹洞宗 HP によれば、「「禅をきく会」は、広く「禅」に親しんでいただく行事として、著名な講師による講演やいす坐禅の体験を行っています」（http://www.sotozen-net.or.jp/gyoji/20160906.html）と紹介される。
*21「親鸞思想の解明」は毎回 500 人規模の施設で開催されるが、2016 年 10 月開催の「禅をきく会」は 1,582 席のメルパルクホールで開催されている。
*22 閉店しているが、カフェ・ド・シンランのサイトは https://www.sotokoto.net/lohasbar/ である。
*23 高野山カフェは 2007 年 9 月に表参道のカフェ Hy's で開催されたのが最初である。
*24「お布施の包みは必ず黒白の水引ですか？」（「SECOND STAGE」、日経 BP 社、2009 年 1 月 23 日）において、ジャーナリストの碑文谷創は、「都市部では、例えば東京では、檀那寺をもっている人が 5 割程度。後はどこにも属していない人で、私はこれを「宗教的浮動層」と呼んでいます」（http://www.nikkeibp.co.jp/style/secondstage/manabi/ceremony_090123_6.html）と言う。
*25『全国寺院名鑑―北海道・東北・関東篇』（財団法人全日本仏教会・寺院名鑑刊行会、1969 年）によれば、浄土宗は 432 ヶ寺で次点となっている。
*26 末尾に添付した参考資料、伊東昌彦「東京における仏教系の講演会・講座の開催状況（2013 年度）―大学主催のものについて―」を参照。
*27 ユニバーサル化に取り組む大学であっても、たとえば東京都における高等学校卒業者の「大学等進学率」は 66.5% であり、これは全国最高値であるが 7 割にも満たない（『学校基本調査―平成 28 年度調査の概要―』、文部科学省）。しかも「大学等進学率」が高等学校の「卒業者に占める就職者の割合」を抜くのは平成 5 年以降であり、この年代は現在まだ 40 代である。シニア層にまで広く大学が身近なものとなるには、大学の取り組みを考慮したとしても、まだ時間がかかるとするのが妥当ではあるまいか。
*28 典拠不明。
*29 多田はこれに加えて、現代人は仏教に「この世での個人の生き方」を求めており、瞑想などへの関心は「自分が変わったという実感」の獲得が目的になっていると推論する。蓋し適切な分析であろう。現代は宗教の持つ本質的な問いかけよりも、一時的な問題解決が優先される傾向にあると言える。
*30 村上重良は『世界宗教事典』（講談社、2000 年）において、「宗教を成立させている基本要素は、宗教の客観的な事実が示しているように、神、仏、霊、法、原理、道などとよばれる超絶的ないし超越的存在を認める特定の観念（宗教観念）である」（p. 4 ）と述べる。
*31 ただし、いわゆる「ナイトスタンド・ブディスト」のように、信仰としてではなく教養として親鸞に親しみたいという層もいる。こうした層が積極的に講演会・講座に参加しているとは考えにくいが、その動向は注視しなければならない。なお「ナイトスタンド・ブディスト」については、ケネス・タナカ『目覚める宗教 アメリカに出会った仏教―現代化する仏教の今』（サンガ新書、2012 年）を参照。

*32 京都の東本願寺は公式には「真宗本廟」であり、東京本願寺も分離独立してしまっているので、大谷派としては「本願寺」が存在しない状況にある。
*33 2014 年現在を示す。
*34 爪田一壽「首都圏講演会情報データベースの構築に向けて―一年間の情報収集から見えてきたもの―」(『浄土真宗総合研究』 2、2007 年)。
*35 伊東昌彦「東京における仏教系の講演会・講座の開催状況（2008・2009 年度)」(『浄土真宗総合研究』 6、2011 年)。
*36 伊東昌彦「東京における伝統仏教教団の講演会・講座の開催状況（2010・2011 年度）―浄土真宗による総合的な仏教講座の開催に向けて―」(「報告書―東京における講演会・講座の開催状況―」、浄土真宗本願寺派総合研究所東京支所、2012 年)。
*37 伊東昌彦「東京における浄土真宗の講演会・講座の開催状況（2012 年度）―本願寺派と大谷派について―」(「報告書―東京における講演会・講座の開催状況―」、浄土真宗本願寺派総合研究所東京支所、2012 年)。
*38 伊東昌彦「東京における仏教系の講演会・講座の開催状況（2008・2009 年度)」(前掲）の「4、カルチャースクールからの発信」(pp.70 ― 71)」を参照。
*39 2013 年度において、武蔵野大学は法学部・経済学部・文学部・グローバルコミュニケーション学部・人間科学部・環境学部・教育学部・薬学部・看護学部の 9 学部となっている。
*40 http://www.musashino-u.ac.jp/guide/information/students.html を参照。
*41 2013 年度において、淑徳大学は総合福祉学部・コミュニティ政策部・看護栄養学部・国際コミュニケーション学部・経営学部・教育学部の 6 学部となっている。
*42 http://www.shukutoku.ac.jp/university/shukutoku/org.html を参照。
*43 2013 年度において、大正大学は文学部・表現学部・人間学部・仏教学部の 4 学部となっている。
*44 2013 年度においては、浄土三部経のほか、親鸞と七祖についての講座が開催されている。また、https://rec-ryukoku.jp/search/ を参照。
*45 2013 年度においては、密教についての講座のほか、浄土宗学に関係する講座が開催されている。また、http://www.t-map.net/open/ を参照。
*46 早稲田大学サイトによれば、「早稲田大学エクステンションセンターは “Extension”（＝拡張、開放）の意味するとおり、早稲田大学の研究・教育機能を広く社会に開放するための機関です。早稲田大学は、創立当初より校外生を対象にした「早稲田講義録」の刊行、各地での「巡回講話」の開催等を通じ、生涯学習の推進に取り組んで参りました。エクステンションセンターは、この伝統をふまえ、1981 年に発足しました。早稲田大学の教授・名誉教授をはじめ、第一線の学者・実務家等による公開講座を学ぶ意欲のある全ての人々に提供しています。1988 年には公開講座の総称を「早稲田大学オープンカレッジ」と改め、独自の単位制度を導入しました。また、2001 年度には、八丁堀校 (東京・中央区)、2014 年からは中野校（東京・中野）を新たに開校し、3 校体制でさらなる生涯学習の充実に努めて参ります」(http://www.ex-waseda.jp/about/）と解説されている。なお、「年間 1800 講座」と謳われてもいる。

*47 2013 年度において、早稲田大学は政治経済学部・法学部・文化構想学部・文学部・教育学部・商学部・基幹理工学部・創造理工学部・先進理工学部・社会科学部・人間科学部・スポーツ科学部・国際教養学部の 13 学部となっている。
*48 http://www.waseda.jp/jp/public/students.html を参照。
*49 伊東昌彦「東京における浄土真宗の講演会・講座の開催状況（2012 年度）―本願寺派と大谷派について―」（前掲）。
*50 大谷派は東京において、別院的機能を持つ真宗会館（練馬区）のほか、学術拠点として親鸞仏教センター（文京区）を開設している。